

鍍絵豆知識

●**鍍絵とは**、平らに塗られた漆喰の壁面（白壁）に鍍を使って浮き彫りにし、彩色して描いたレリーフです。

●**鍍絵はどのようにしてできたのでしょうか。**①佐官さんが家を完成させるまで長い間お世話になったおれの印としてプレゼントしたものと、②施主さんが左官さんに招福避邪を願って依頼して作ってもらう場合があります。絵に心豊かなくらしを願ったものです。鍍絵は、戸袋や切り妻（妻壁）や土蔵の壁に多く描かれました。

●**鍍絵にかける願い**は、恵比寿は商売繁盛、大黒天・おかめは福の多いことを、虎は疫病除け、龍は火よけ、鷹は富を、鶴は長寿、波うさぎの波（水）は火事除け・うさぎは（子どもをたくさん産むので）子孫繁栄、朝顔は（蔓が伸びるので）繁栄、富士山や鷹は一富士二鷹三茄子という縁起物といった具合に絵によって違います。

●**本格的鍍絵の始まり**は、江戸時代の後期で、静岡県松崎町の佐官伊豆の長八（1815～1889）が最初だと言われています。伊豆の長八の鍍絵は、色づけを筆でした「上塗り法」ですから、欄間や床の間に多く描かれました。

安心院の鍍絵の歴史は、伊豆の長八に日出町の左官青柳鯉市が学んできたものを龍王出身の左官頭領長野鐵蔵を中心に弟子たち（14人）が鍍絵を広めていきました。

●**安心院鍍絵の技法**は「練り込み技法」と言って、白壁の漆喰を塗った後、絵を立体的に盛り上げて塗り、漆喰に色を混ぜた色漆喰を更に塗るわけです。ですから、雨、風にさらされても風化しないで100年以上経っても鮮やかな色を今でも残しているのです。むしろ、風化によって下の新しい色が出るのだといえます。

●**鍍絵の色**は、岩絵具と言って土、石、岩などを砕いたり、貝殻を焼いて彩色を出したり、黒色はかまどのスス・まつやロウを燃やしたススであったりといろいろ工夫がみられた自然のもので、当時としては6色しか出せませんでした。当時の顔料は大変高価、貴重で、ほとんどが輸入品でした。

●**現在は、化学顔料**ですから緑色も使われます。しかし、昔と比べて淡い感じが出なかったり数年して色あせたりすることもあるようです。

●**鍍絵の数**は、全国で約3000点、大分県で約1000点、安心院では約100カ所に点在しています。安心院は密集度からみると日本一です。

●**安心院に鍍絵が多く残ったのは、4つが考えられます。**

1. すぐれた左官職人が多くいたことです。左官の大棟梁の長野鐵蔵とその弟子14人が競ってすぐれた鍍絵を作りました。
2. 漆喰の原料が手に入りやすいことです。長洲の海岸のカキガラや津久見の石灰石を運んできました。
3. 蚕を飼う家が多く比較的生活が裕福な家庭が競って「蔵」を建てました。
4. 安心院には大きな変革を伴うような道路拡張工事、大火災、戦災がなかったことが保存状況をよくしました。